



第 4 章

柔道整復師とは

歴史的経緯，法制度の推移・現状

1．柔道整復の歴史的経緯

柔道整復とは、「接骨師」または「ほねつぎ」と呼ばれ、骨折・脱臼・捻挫・打撲・挫傷などの施術者として、永い歴史を持って今日に至っている。しかし、柔道整復師といわれてもすぐに理解できる人は少ないのではないか。医療関係者、福祉関係者はもちろん一般の人々でも、きちんとは理解していないようである。

柔道整復師（接骨）の歴史を遡ると、人類が文化的な生活する以前より、人は動物と同じく体が病んだり、傷つくと本能的に身体に手を当て、舐め、温め、あるいは冷やし、食餌に変化を与えるなどをしていたと考えられる。いわゆる「手当て」、「養生」などの原型である。

原始時代以後は、果物、魚貝、海藻などの単なる採取による生活から、狩猟、漁撈、農業と生産力が強化されるに従い、集団の規模は拡大の一途を辿り、ついには部族制が確立し、指導者と指導者との間に階級分化が起こり国家の発生を見るに至った。この過程において生産労働、猛獣などとの戦い、人間同士の戦闘などにより外傷を受ける機会は増加し、骨折、脱臼、打撲、捻挫なども頻発するようになり、これに対し何らかの治療が行われ、その積み重ねのなかでいろいろと取捨選択が行われ、医療技術としての定着確立を見るに至ったと考えられている。

原始時代の医術は呪術的要素が多く、心理的效果以外には合理性のきわめて薄いものであった。外傷に対してもある程度の治療法が存在したことは、わが国で発掘された先史時代の人骨のなかに大腿骨、橈骨、尺骨などが骨折し、屈曲転位や回旋転位のままであるにせよ、癒合した形跡が歴然と見られることから証明されている。ただ、治療といえるほどではなく、生活の知恵程度であったと考えられる。それは骨や靭帯などは自然治癒能力の高い組織なので、そのままでも癒合するため治療をしたのか、そのままなのかは定かではない。しかし仮骨が形成され骨が癒合したことは、骨折をしてすぐに死んだわけではないということを証明している。

a. 古代の接骨術

各種の古文書のなかでも、『養老律令』（718年）に骨や関節の損傷に関する記載がされている。さらに平安時代の古書にも「円融天皇の御代に接骨博士数名あり、各自特有の手法を持って整骨し……」と、このあたりで接骨という名称が記載されている。最古の医学書『医心方』（982年丹波康頼）には、骨・関節に関する損傷が詳細に記述され、ときの天皇家より典薬頭半井家に賜った門外不出の秘本として伝えられている。

わが国における最古の医療記録は、和銅元年（708年）に太安萬侶が勅命を奉じ撰録した『古事記』の上巻に見ることができる。有名な白兔伝説で、大国主命が蒲黄（がまの花）を創傷に用いることを教え、また自分も火傷を負った際、赤貝の粉を蛤の汁で溶いて患部に塗ってもらって回復したと書いてある。また、上巻中のいわゆる国譲りのくだりで、大国主命の子建御名方神（諏訪神社上社の祭神）が高天原から派遣された建御雷之男神（鹿島神宮祭神）と力比べをし、まるで若草をつかむように手を握りつぶされて、信濃国諏訪湖畔まで逃げて降参したということが書かれている。この骨折を治療したのが建御雷之男神であることから、鹿島神宮の祭神は接骨術の祖神であるという伝説が語り伝えられている。神話の世界の話であるが、接骨術がその当時から行われていたことを証明している。

『医心方』以後、平安時代の日本の医学はやや停滞気味で、接骨術においても進歩はなかった。しかし、武士の台頭による絶え間ない戦乱に負傷者が続出し、各地の豪族にとって戦闘力であり、生産力である郎党の負傷を早く回復させるため、専属の外科医（金創医）を常備する必要があった。この金創医は骨折、脱臼などの治療者でもあったが、身分や待遇を維持するために治療法に関して極端な秘密主義をとり、一子相伝としたため自然と流派が形成された。当時の医学書は今日まで残っているものも多数あるが、各流派の内容は大同小異、呪術的な一面を残しながら、中国の医学書を参考にしているものが多い。

元和5年（1619年）、陳元賛（1587～1671年）は中国から日本に亡命してきた文武両道の達人である。中国虎林の人で長崎に来往し、その後江戸に出て、麻布板倉の草庵および国昌寺に滞在した。三浦義辰、福野正勝、磯貝次郎左衛門の三武士と国昌寺関係の柔術僧に中国拳法を教えたのは1625年の4月上旬から1627年9月16日までで、これが日本柔術流派の一元流となり、同時に伝授した中国正骨術が柔術と接骨術との結びつきの端緒となった。その後、いかなる流派、人脈を経て今日に至ったかは、それを立証する文献が少なく接骨術との関係は必ずしも明らかではない。

b. 江戸時代の接骨術

日本独自の要素が濃い接骨術の系統として、さらに2つに分けられる。まず実証科学の系統として、わが国の近世接骨科史上の三大巨人、星野良悦、各務文献、二宮彦可があげ

られる。

星野良悦（1754～1802年）は広島県に生まれ、正骨師を志したが技法の秘密主義に憤慨し、死刑者の死体より骨、関節の機構を理解し、正骨術の基礎を学んだ。当時は人骨の所持を禁止されていたので、木製の骨格模型をつくらせ「身幹儀」と命名し、一体を幕府に寄贈した。

各務文献（1754～1819年）は医学に志を立てて古医方、産科、整骨の3つを勉強したが、その後さらに整骨医を目指し、大坂難波の骨継「伊吹堂年梅家」に入門した。しかし、整骨術を秘伝として弟子にも教えないことに憤慨し、自分で研究して修得するしかないと考え、それには骨、関節の構造機能を知ることだとして解剖を行った。真骨を求め、1810年『整骨新書』3巻に精巧な図譜「各骨真景図」と「全身玲瓏図」2枚を付して出版した。西洋医学の解剖書を参考に、中国整骨術の妄説空弁に追従することなく西洋医学の欠点も指摘しているものである。復刻版を見ても、本の最初は解剖図から始まっており、かなりレベルの高いものである。

二宮彦可（1754～1827年）は静岡県に生まれたが、幼児期に梅毒に感染して、14歳のとき同藩の口中医二宮家に養子に出された。19歳で口中医を学び、その後内科、外科、産科、眼科を学んだ。35歳のとき、長崎に赴き吉雄耕牛に外科を学び、正骨術を知る。「西洋に正骨法ありと雖も、独り機を用うるに巧で、手法については講ぜず」と正骨術を高く評価した吉原元棟に師事。吉原伝授の杏蔭齋流整骨術に「正骨心法要旨」や「素問、靈枢」などの漢方の知識を加え、これに西洋医学の包帯法を取り入れて『正骨範』乾坤二巻を著し、1807年に刊行した。

それまで整骨科を専門とする者は少なかったが、星野、各務の名家の出現によって整骨科を専門とする者が輩出して技術も大いに進歩し、日本の医学史上「整骨科」を外科の一派として不動のものとした。各務文献の門下では奥田万里があり、彼が尾張藩に献上した木骨（奥田木骨）は一時行方不明であったが昭和53年に発見されている。

江戸中期の1720年には、八代将軍吉宗の洋書禁制が緩和され、西洋文化の移入とともに、柔術活法に由来する接骨術も日本各地にてそれぞれの流派が独自の道を歩んだ。この頃、前記の二宮彦可や磯又右衛門などの柔術家らも西洋外科の包帯法を応用した技術を生み出している。

わが国には古くから中国大陸の医術が伝わり、医師のほとんどは漢方医であった、しかし、江戸期になり西洋流の医学、すなわち蘭学が紹介され、その優秀さを知り、伝統的な漢方と西洋流の医学の長所を取り入れていこうとする医師が現れた、代表的な医師は永富独嘯庵と華岡青洲である。永富独嘯庵は山脇東洋に学び、西洋医学の優れていることに気付き、病理解剖の必要性を説いた。また華岡青洲は全身麻酔薬としての「通仙散」の発見